

呪いの代金

緑川聖司

中原じゅん子画

「お、出てきたぞ」

道彦の言葉に、ぼくたちは建物のかげから顔を出して、本屋の入り口に注目した。

青いトートバッグを胸に抱えた晴人が、こわばった表情で店から出てくるのが見える。

店から一歩、足を踏み出して、晴人がホッと表情をゆるめた瞬間、

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

店の入り口に設置された防犯ゲートから、甲高い機械音が鳴り響いた。

道彦は「チッ」と舌打ちすると、

「おい、逃げるぞ」

そういって、晴人を見捨てて走り出した。

みんなと一緒にあって、道彦の後ろを追いかけながら振り返ると、晴人が真っ青な顔で、店員さんに腕をつかまれているのが見えた。

「晴人のやつ、どじりやがって」

商店街のはずれにある児童公園まで来ると、道彦は顔をしかめて、吐き捨てるようにいった。

「あとで罰ゲームだな」

健太が、道彦の顔色をうかがいながらいう。

だけど、晴人は万引きをやりたくてやってるわけじゃない。道彦に命令されて、無理やりやらされているのだ。

あの本屋の防犯ゲートには死角があって、通過する場所によっては、ブザーが鳴らないことがあるらしい——そんな

